

5-12. 社会の変化と地域防災

いまわれわれは少子高齢化の真ただ中にいることは確かですが、それでもその程度は地域ごとにその状況は異なると思います。地域防災では、よくコミュニティが話題になりますが、年齢構成によっては、助ける人が助けられる人に比べて極端に少ないというところも出てきています。そういう時に、地域全体が防災意識を持って自助も共助もということとは不可能です。かといって、行政が支援するといっても、医療福祉までで、防災までは手が届かないというところだと思います。そのためには、ITを活用して災害対応支援は可能であってもそれを駆使した対応を計画しても、その環境を整備するのは難しい。そうならば、地域内にキーマンを養成して、その方々が支援を求める人を支えることを考える必要があるかもしれません。岩手県のあるところの例ですが、個人対象にした防災支援情報を整備して、何が必要なかを個人ごとに把握して、キーマンが行動するというをしている地域もあります。そこには、何が避難の障害になっているのか、何を求めているのかということを一一人一人に対して把握されています。もちろん、最低の基本的な情報を地域全体で共有することは大事で、どこが、何が危険なのかということだけを理解しておく、自分だけは大丈夫といった正常化への偏見だけはなくなるような気がします。

今の時代を象徴することに少子高齢化と情報時代があると思います。少子高齢化は地域ごとに様々なタイプがあって、一様にコミュニティの醸成ということができないところもあります。実際に、高齢化が進行して活動に参加することが難しいところもあれば、子供を含む若い世代が優先しているところでも、その状況が継続する保証がないことや防災、防犯、防火に関心がないという地域もあります。

そうすると、継続した防災力を上げるためにはこれまでの考え方を変えていく必要があります。ほとんどの方々は、「要するに何かあった時どうすればよいのかだけを知らせてほしい」と思っているわけで、地域における災害リスクも避難方法も今のところ必要ないと思っていることが多いように感じます。ある意味で指示待ちになっていて、講習会や地域の人とのお付き合いは面倒で遠慮したいと考えている方が若い世代でも高齢者でも同じです。昔のように、災害が発生または予測されているときに、情報が一元化されて発信される場合には、指示通りに行動を起こすということもできましたが、最近では情報が多く、その情報を適正に評価しないととんでもないことが起きます。つまり情報過多の時代で、正しいものを選択する力が必要となります。災害時とか非常時には突発的なことからさまざま情報が混交し飛び交って判断に苦慮しますし、間違った行動に繋がります。このような噂的なものは、知りたい、願望、憶測ということが背景にあると思いますが、それがSNSのような拡散のスピードが速まる反面、寿命は短いのですが、また新しいものが流れるという具合で、相当な知識を有していないと勢いに流されやすくなります。そうすると、自分の都合の良い情報だけを選択したり、逆に必要な情報が信じてもらえないということも起きてきます。最も懸念されることは、緊急性のある情報を埋もれさせる危険性があることを自覚しておくことが必要な時代になったということです。